
僕はフヘンな中学生

ささぐれタロー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕はフヘンな中学生

【Nコード】

N9864D

【作者名】

ささぐれタロー

【あらすじ】

フツウの中学生。ある朝、目覚めると友達の立花悠になっていた？…中学1年生と言う少年の目から捕らえた世界。それが書けたら本望ですw

第1話：ある朝、僕は かつこわんかつこ（前書き）

当小説は、芋小僧と言う田舎っぺが書いたものです…
誤解等のことは私めにご回答なさってください。

（今の駄洒落って分かった？ W）

第1話：ある朝、僕は かつこわんかつこ

ある朝、僕は。

友達たちはなゆうの立花悠たけはなゆうだった。

そして、悠は。

僕じゃなくってはらだりようや原田亮也。

だから、りよーは。

僕、伊井橋隆一いいはしりゅういちになってる。

そうやって、今日でもう5日目だ。

ある朝、僕は

悠には恋人がいる。 って言うか、僕は知らなかったからいたって言った方がいいのかも。

恋人は隣のクラスの高梁遊井たかはしゆい。

中々の美人さん。

悠は格好良い。 だからこんなひとと付き合えるんだなあとかまあ中学1年生とかとしては普通なのかなあと思ってる。

そんだけの五日間。

悠はりよーになるのを毛嫌ってる。

「なんでこんな奴にならなきゃいけないーんだ」とか「ふざけんな」とかほざいてる。

別にりよーになったっていいじゃん。

同じくらい格好良いし。

やっぱりひとにとってのコンプレックスとかあるのかな。

そういえば。 高梁さんは僕のこと嫌ってる。 なんでかなあ：

りよーはなぜかニコニコしてる。

まあ、もともとニコニコしてるけど。

だけど。 悠とケンカするとなると本気マジになる。

何のことについてかは分かんないけど。

いっつも僕が絡む前にケンカしてる。　なんでかなあ。

まあそんなこんなの5日間。

そろそろ本気で元に戻る方法見つけないといけないのに…

悠は激しく同意してるけど、りょーは否定してる。

そのことで、またケンカして。

もうこの姿になってケンカの仲裁してのは2回目だ。

何でこんな仲悪いのかなあ…

犬猿の仲ってやつかなあ…

何か、この姿に…悠になって考えることが多くなったような気がする。

自分が自分じゃないようで…

自分だけど自分の姿じゃないって…

13年間生きてきて、ずっとあの姿なのに…

何か、ため息ばかり出てるかも。

「ゆー…」

僕の呟きはゴォォツと凄い音を立てて鳴ってる春の季節風に吹かれた。

第1話：ある朝、僕は かつこわんかつこ（後書き）

第1回目。 短いですw

そしてへたれです。

でも、自分は途中で投げ出すことが嫌いなので
当分は続けていこうかとw

ある朝、僕は かつこつーかつこ

あの凄い風の音で、悠は薄々気付いてた。

みんながキャーとか叫んでるのに：

「んー： りゆ？ なんか呼んだ？」

りゆとは僕のこと。

「あのさ。 寝てみない？ 3人で…」

僕は喉が詰まって最後の方がちゃんといえなかった。

「な、な： なにいつてんだよおお りゆ…」

「なにが？」

「ねたつ： ね：ねてもいいけどよー： りよーは無しだぜ…」

「はあ？ いや、3人で寝たら 朝、戻ってたりとか？」

「まあさか、りゆがこんな大胆とあ： は？ 戻る？ ああ：そーゆ

ー意味か」

他にどんな意味があるの？ って聞こうとしたけど飲み込んだ。

「ほら。 三人寄ればブンシュの知恵っ！」

「いや、三人寄ればモンジュの知恵な」

りよーが入ってきた。

「ぶんしゅじゃないのっ？！」

「もんじゅ ってか。しかも、意味違う。 こんなところで使わん」

「りよーもねよー」

僕が言ったらりよーは怒ったように

「りゆ。 そんなこと言っていると、そこら辺の飢えた男にぐちゅぐちゅされズブズブされてどぴゅってされるぞ」

「何、怒ってんの？ なにそれ？ ねー悠？ ね？」

「あっ：ああ： そうじゃなくてな、一緒に寝れば元に戻るかもつて」

僕の方を向いて、りよーに説明した。

「寝るってそっちか」

「ほかにどんな寝るがあるの？」

僕にむかって知らなくていいし、いずれ知るって言ってきた。
また、子供扱いされた。同い年なのに：

僕は子供みたいにぷいっと頬を膨らませ横に顔を向けた。

「ガキ」

悠から言葉が来た。あれ？りょーだろ。言うの。

「まあ、可愛いけどなあ」

「言葉、チヨゲチヨゲじゃん」

「チヨゲチヨゲって何語だよ はいはい。トゲトゲしてますけど」

「そうゆー意味違う。チヨゲチヨゲは何か喜びに乏しいってことだもん！」

「はあ？」

「チヨゲチヨゲを使いこなしておらんな。おぬし」

「はあ…」

「チヨイひつれー」

りょーが言ってきた、あんって変な返し方した。

「誰の家で寝んの？」

「りょーん家。めっちゃ寝やすいんよ」

僕は笑っていったけど。二人の顔は険しくなった。

悠は、

「ふざんけんな。こんな奴の家で寝れるか！」

りょーは、

「誰がこんな奴寝さすか。りゆならもろおっけーだけど」

むう：僕は腕組みをして首をしかめた。

「じゃあ。僕ん家？」

「ああ：別にいいけど。お前が真ん中はいれよ」

「賛成。りゆ真ん中な」

僕ん家になった。先が思いやられる。

第2話…ある夜、僕は かつこわんかつこ

学校も終わった。

悠は今日、部活を休んでくれた。因みに、硬式テニス部。

僕は、サッカーでもするのかと思った。

てゆうか。 悠はって言ってるけど。

僕なんだよね。言ったのは。 だって、僕今、悠だし。

顧問。怖かった。 くそっ。 あのはげ。

と、ちっちゃく僕は呟いたけど。 説教中に。

なんで僕がって感じで。 早く戻りたいなあ…

そういや、5日間部活行ってなかったし。 そのせいでこんな、怒られたのかも。

りょーは部活入ってない。

僕も部活する気ないし。 二人で図書館行って。

本読んで帰る。 コレがいつものコース。

でも、今日はコンビニに寄る。

今日、おや。居ないし。 夫婦水入らずの旅行だし。

だからご飯とかお菓子とか買って帰る。

悠が酒入れようとしてたけど。

「めっ」ってした。 健全な中1の癖に。 てゆうかりょーの体でもあるし。

で。今、とりあえずご飯も食ってひと段落。

時計は8時になってた。 他にもお店寄ったから。

帰ったのは6時40分くらい。

「お風呂作ってくるねー」

僕が言うと悠がチャラけたように

「おー おれ、お前と入るなー」

「はー？」

僕が風呂場から答えると、声が消えた。

どうしたんだろう？

ま、いっか。

洗お。

洗剤付けたたわしでごしごし拭いてると、叫び…怒鳴り声が聞こえた。

りよーの。 珍し。

またケンカかあ… はあ…

「うっせーな！ りよーは心配性すぎんだよ！」

「だまれ。 お前は軽すぎだろうが！ だいたいお前触りすぎなんだよ！」

「別にいーじゃねえか！ ダチだし。 まだ… おっ。 よし、りゆ。 風呂掃除終わった？」

何か、二人が怒鳴り声上げて怒ってるなんて珍しいかも… え？

「え？ あっ…まだ…」

僕は答えて、風呂場に戻った。

なんのケンカだろ。 触りすぎて… 女の子？ かなあ… いいなあ…

そんなケンカできて… 二人はフツウに二人なのに、僕だけ置いてかれてる気分…

やだなあ…

そんなことを思いながらまた、ごしごしたわしで風呂釜を拭いてた。

「お風呂、出来たよ。 入る？」

「え…あーお前、入れよ」

悠はポテトチップを食べながら、言った。

「えー僕はいいよー りよー入れば？」

「あ…ああ…」

「あ。 待つて」

洗濯物からバスタオルを取り出す。綺麗にたたんでリビングへ向かった。

「ハイ、バスタオル」

僕はにっこりして手渡した。

りょーは一瞬、詰まった。

「ああ… サンキュッ」

そう言っで、緑のメタルフレームのメガネを押し上げた。
って、りょーならするだろうけど。

今は僕の体。　メガネなんてないし。

ある夜、僕は かつこつーかつこ

僕の体で、今。 りょーはお風呂に入ってるのかな？
こんな想像していると、顔が真っ赤になってくる。

人が自分の体を見るなんて…

「どしたー？ りゆ？」

「えっ… いやっ！… 別にっ！」

真っ赤で焦って答えた。

フツウだと、可笑しいと思う。

「どした？ 自分の体見られてるって思ってるのか？」

エロいな

ー りゆも」

凄い笑顔。 しかもりょーの顔で…

ドキッと胸が高鳴った…

「なんっ！… でもないっ！！」

ギュッとふんわり体を抱きしめられた。

「ああーなんか可愛いー」

「…って自分じゃん！」

「自分だけどー… なんかりゆがかわえー」

そう言って耳を甘く噛まれた

「ひあっ！ 悠？…」

「やか？」

まじめな… カッコイイ… うあ…

もー… やだ…

「やあ！ だっ！」

シャツの中に手を入れられて、胸を摘まれた。

「なにしっ… ゆー… やだっ！」

「やでも。 やめねー…」

「自分の体じゃんっ！」

「りゆが入ってるからいい」

悠。 あっ… かつ

「かつ…彼女いるじゃんっ！」

「あっちがそー思ってるだけ。 おれは彼女って思ってたねーよ」

悠の…りょーの手が、悠のっ！？… 頭が混乱してきた。

「やだっ！」

「りゅ… いいかげんっ！ …あ。 ごめん。 遊びすぎたわ…」

僕は泣いてた。 大粒の涙を零してた。

悠はにこっと笑って言った。 やだっ…

やだよ…

自分じゃないもん… 悠だもん…

わるくないもん…

それから10分くらいしてから、りゅーが出てきた。

「りゅーいいなー りゅのちんこ見れてー」

僕とりゅーは同時にボツて顔が赤くなった。 りゅーのそんな顔見

るの久し振り…

「誰が、見るか！ ぜってー見ない」

りゅーが僕が泪流してることに気付いた。

「いやー… だから、見てないって…」

「ちげーよ 俺がわりの」

僕はビクッと顔を上げた。

「はぁ？ 何したんだ？ お前」

「ううん… 悠は何も…グズッ…してないよ…」

「いや、そんな涙モロモロで言われても…」

「悠。 そのビールどーしたの？…」

悠の手にはビールがあったのを気付いた。 話変えなきゃって思っ
て。

必死になにか探した。 見つけると、僕は涙を手の甲で拭いて答えた。

悠の手ってゴツゴツしてるなあ…

「あー れーぞーこにあった」

「それ、父さんの…」

「まっいいじゃんっ！」

「よくないっ！」

「よくない！」

僕とりゅーの聲がはもった。

「父さんの飲んだら僕が何か言われるのに！」

「俺の体でそんなもん飲むな！」

「あー… 一本だけ一本だけ」

パシーンツてりょーが悠の頭を叩いた。 いい音…

「わりいわりい」

テーブルの上にビールを置いた。

「じゃあ。 僕、お風呂入ってくるね」

ヒラヒラと手を振った。

お風呂場に向かう。 僕がリビングから出て行くと、二人が何か話し始めた。

やっぱり、僕って…二人に要らないものなのかな…

そーして。 そんな考え事や、さっき悠にされたことを思い出して。

僕は、のぼせた。

ある夜、僕は かっこすりーかっこ

最初に、気付いたのはりょーだった。

30分しても出てこなかったので、見に行ったら…
だって。

あーあ… りょーと二人きり。

悠は風呂入りに行って、10分。 まだ、帰ってこない。

なんか、きまずい…

「あっ… あのさ… さっきはありがと…」

「あ？ ああ… べつに…」

「別にいーよでしょ？ 分かるって」

僕はにつこりした。 りょーもにつこりした。

二人とも、優しい。 僕にただけけど…

りょーは、他の人にはめっちゃめっちゃ冷たい。

悠は、誰にでも人気がある。 クラスの人気者ってゆーかムードメーカー。

僕はなんの取り柄もない。 フツウの、中学生。

勉強だってフツウだし。 運動だってチヨイドジはいつてるし…

二人。 悠は、勉強馬鹿だけど。 りょーはむちゃくちゃ頭いい。

学年一かも…

運動は二人とも凄い。 りょーってめっちゃお買い得じゃん。

それなのに、二人は僕に優しい…

たまに、重いつて思うことがあるけど。 なんか、嬉しい。

「さっきさ、悠にさ… その… 何か一悶着あったんだろ？」

「ひともんちゃく？」

「あっ… ああ… 何かされたって事」

自分の顔がみるみるリングみたいになくなっていくのが分かる。

「あっ… なっ 何もないよ？」

「嘘付け… かーお。 真っ赤だぞ？」

りよーは、僕と二人のとき。　何かに焦ってる。　なんに焦ってるのかな。

「さっき、悠から聞いたぞ。　ったく、あいつはホントに軽い」

「でもね…　大丈夫だよ？　そりゃちょっと、怖かったけど…大丈夫」

僕は僕の体に腕を伸ばして引き寄せられた。

「強がなくなていーの。　さっき、ちょっと叱ってやったし」

「ねえ」

「あ？　何？」

「悠を叱らないでよ…」

「はあ？　あんなこと、されたいのか？」

「そじゃなくて。　何か、うん。　ケンカしないでよ…」

「ケンカ…なんてさ　別にいつものことだろ？」

りよーはやっぱり詰まった。　僕が変なこと聞くと、たまに詰まる。

「でも。　やだっ　仲、悪くなるのは」

「おい　別に仲悪くなってねーだろ」

「僕もー寝るー」

「おいっ！」

「オヤスミ！」

僕は、リビングの扉を閉めて。　早足に階段を駆け上がった。

布団を敷く。　雑魚寝でいいや。　3つ敷いた。

僕は、早く寝ようと。　早く寝ようと、目を瞑る。

いつの間にか。　眠りについた。

…うあ頭がいたい…

何時？　あ。　二人とも寝てる。

りよーが右で、悠が左に居た。

ん？　悠が。　左？　あれ？　左。

悠が悠になってる…？　あれ？

「ねえ！！　二人ともおきれっ！！」

りょーと悠の頭をぺちぺちと頭を叩いた。

「なんだよ…りゆ… 折角、気持ちいいトコだったのに」
「変態！」

悠が起きた。何か、異変に気付いた。

「あれ？ これさ。戻ってね？ なあ？」

「僕はあ？ ねえ。僕、戻ってる？」

「んあ。りゆだ。かわえーりゆだー よしよし」

悠はそう言って僕の頭を撫でた。

りょーが起きない。体を揺すっても

大きなりょーの体。僕の体よりも一頭分はゆうひとあたまにある。

そんな体揺すったって、微かにしか動かない。

「りょーおきてー」

「おいっ！」

悠がゴスツと鈍い音を立てて、りょーの頭をぶん殴った。

「…つつっええ…」

小さくも大きい唸り声を上げた。痛かったらしい。

「…って… もー…なんだよ」

なぜかりょーは不機嫌だった。

「自分の体見てみる」

悠が言うと、状況を把握したみたい。

「なんだ。戻ったのか… ちっ…」

「おい！ てめえ！ ちってなんだよちって！ りゆの体で何するつもりなんだよ！」

「いや… 何ってナニ」

りょーがにやけて言った。ナニって何？

「ねー… ナニってなあにー」

僕が言うと、りょーが。べつにーなんでもね。って言った。まただ。子ども扱いされた。

「あー… っかし、りゆがああ糞ガキじゃなくなって良かったー」
「糞ガキって誰だコラ！」

「お前しか、いないだろー糞ガキ。我慢しきれず襲ってんじやねーよ」

「おそっ！…おそってねーよ！」

はあ…なんだ、このケンカ？

「じゃあ。なんだー？ そのねっとりした脂汗。明らかに動揺してるじゃねーか」

まっ。いっか。

元に戻ったし。

僕は、パタンと横に倒れて目を瞑る。明日は土曜日だからイッパイ寝よう。

ある夜、僕は かつこすりーかつこ（後書き）

ちっ。 元にもどりやがた。

何か。 えちなしーん書きたいナー。

とか。

てゆうか。 なにこの、Bえ（略）

第3話：愛してる　って、何語？　かっこわんかっこ（前書き）

しん。　まだまだ終わりじゃないぜ W

（うは W　俺、つづけにやならねえ W W

へたれなのに。　俺、アホス W）

第3話：愛してる って、何語？ かわんかった

僕は、今。 約10秒前。

告白された。 目の前のヒトに。

「一目惚れ」とか言ってきた「愛してる」だって。

愛してる って、何語？

いや。別に、そこまではいい。 フツウはね。

フツウじゃないから… 男ってどうよ。

目の前にめちゃくちゃガタイ体の男が目の前に立ってるよ。

一目惚れとか米の種類か！ 愛してるとか似合わねーよ！

そして。 今、めちゃくちゃガタイ体の男が僕の顔見て、肩を掴んで、せがんでる。

こいつここえーよ。 でも、女の子にはモテてんだって。 コワモ

テってやつかー…

じゃ。無くて。

同じクラスで、しかも前後ろのヒトがこんなこと思ってたなんて…
でも、名前なんだっけ？ たしか、シゲ… 森田^{もりた}… 茂人^{しげひと}…？ だっ
け…

なに、顔にあった名前してんの？ なんで僕に告白するの？

そんなこと考えてたら、シゲが大きな声…って言ってもシゲには普通
通の声。

「なあ？ 返事は？」

「はひっ?!」

「ああ… やべ… ハナヂでそ…」

なんか、分かってきたのでボケてみる。

「ていつ… ティツシュつかう？」

「そーじゃねーだろ？ 今、可愛いかったの？ 分かった？」

「わっ… ワカラナイ！」

「何急にカタコトになってんだよ」

シゲがふうって小さな息を付いた。

そして、脇を掴んで高い高いするかのよう持ち上げた。

「軽いなー… ちゃんと、メシ食べてんの？」

僕、ちっちゃいからねー。 いいもん。ヒャクヨンジュウゴしかないもん！

「身長。 なんぼ？」

「ひゃっ…ヒャクヨンジュウゴ…」

「ちっせ。 つか。 俺とサンジュッセンチも違うわけ？」

は？ ヒャクナジュウゴあるの… 質問。 あなたは中学1年生ですか？

Are you Junior high school student?

うあ。 教科書載ってたっけ。

「あっ…アーユージュニアあっ！」

「ホレ。 たかいたかいー」

僕ってあんたの子供かっ！ て言おうとしたのに

「僕はあんたの息子じゃなっ！…」

見事に咳き込んだ。

「へ？ なんて？ あなたの息子を食べたいですって？ まあ。

大胆っ！ 食べるのは駄目だけど、先っちょ^{くわ}啜^{くわ}えるのならありえ？

「息子ってなんだよ！ ってか、子供いんのっ！？」

「なんだ、エロ通じねーのかー 何かもーむちゃくちゃ可愛いなお前 清純中学生だなー」

僕はアイドルか！

「あーハナヂでそー… ぱーとっー かつこティッシュなし」

「そっ…そこの水道で洗ってくれば？」

「はいっ！ だめー 罰としてキス」

うあっ！ 何、急に顔かしこまってんのっ？

顔、近づけんなっ！ やだっ…

「やだっ！」

「やでもやめねー」

何、この前の悠みたいなこと言ってるの？！

「ふざけっ… やあっ！」

あっ！ あと2センチ…

2ミリ…

ちよっと硬い唇が触れた。そして、そっと離れた。

でも、カサカサでキスしたって感覚はなかった。

じゃねー！！！！ ファースト・キス…はりよーだけどっ…て、何思
い出してんだ！ 自分！

アレは忘れようって… うあああ…

「やーらけー… ヒトの唇なんて、初めて」

あ キス。 したことないんだ…

「でも、カサカサだったしキスしたなんてわかんね」

ニコツと笑った。 僕は多分、涙目だったんだと思う。

「あっ… なっ泣くなよ！」

でも… 泣かない。 そして、キスしたことないって。

何か、良かった。 フツウの中学1年生なんだって分かった。

ただ。 おっきーだけで…外見だけで、決め付けてた…

僕が、顔をうつむかせてると。察したように、声を掛けてくれた。

「てゆうか、俺らの掛け合い楽しくね？」

僕は、こくって頷く。^{うなず} 楽しい。

「お笑いのコンビ組んで、売れてみねー？ 表じゃ、むっちゃ仲良
い面白いコンビ！ 夜じゃ、むちゃくちゃ息あってるの？ どーよ」

なんの？ 息が…

「エロ」

「うっせ」

笑って答えた。 フツウの中学1年生だ、うん。 少なくともソレ
を言われるまで忘れてた。

「で。 返事は？」

「あ… ごっごめっ！ あっ…待って！ あさって！」
「どっちだよ。 でも、良かった。 少なくとも、希望はあるんだ
な？」

ニコッてした。作り笑いなんだなってわかったけど。
辛いんだって分かったけど。 僕はニコッて返した。

第3話：愛してる　って、何語？　かっこわんかっこ（後書き）

うはうは。

ホモキター（。▽。　）！

愛してる　って、何語？　かっこつーかっこ

悠にでもそーだんしよーかなー：

いや。　悠は駄目だ。　りよーならフツウに聞いてくれそう。

そんなことを思っ、受話器を持っ、

りよーのケイタイ電話の番号を押した。

プルルルル：

プツツ：繋がった。

「もしもし。　りよー？」

「あ？　ナニカヨウ？」

「どしたの？」

「あつ　いや別に：　お前は？」

「ねえ。　僕ん家来てくれる？」

「はあ？　ああ　別にいいけど：　どしたー？　告白かあ？」

ズキッて胸の奥が音^ねを張った。

「とっ：　とにかく来て！」

ガチャンッ！　と大きな音を立てて受話器を置いた。

それから5分でりよーは来た。　りよーとは近所付き合いくらいの

家の距離だから。

ピンポンとチャイムが鳴った。

僕は玄関を開けてどうぞって言った。

「おっす。　何？　まじで告白かア？」

「とりあえず、2階。　僕の部屋行こ」

「ああ：」

急に声が低くなった。　それに、僕は思わずビクツとした。

僕の部屋に入った。　のは、いいけど。　2人黙り込んでる。

りよーが口を開いた。

「でー　告白は？」

唐突な質問にまた、ビクツとなった。

「え… あ… うあ… あっ…」

声が出ない。 何から、喋っていいのか…

「どしたー？ なんか言えよ」

ちよつと照れ臭そうにりょーが言う。

顔がみるみる赤くなつてく。

「えあ…うっ…う…あ シゲのむすっ…息子くわえっる… あ」

「はあ?!」

怒ったようにりょーが言った。

「なんだ？ それー？」

無理もない。 僕も分けわかんない。

何で、よりによってこんなこといったんだろ…

「んー？ なー？ 森田となんかあったのかー？」

怒ってる。 イライラしてる… 肩に腕を乗せて抱き寄せてきた。

「こっ…告白された…」

りょーはふーんって鼻を鳴らした。

「へー…」

「…うん」

「へー… はあ!!!?」

りょーが今まで出した事のないような大きな声を出した。

クールで秀才で通ってるりょーが。 僕も聞いた事のない大声を出した。

「モ チ ロ ン 断ったよな？」

僕はふるふると首を横に振った。

「何でフラねえの？」

「わかんなかった… ごめんって言ったけど…んか可哀想で…」

「伸ばしちゃったわけか？」

ピクンて反応して、首を上げた。

「何で分かったの？」

僕は首をかしげる。

「答え。3つしかないだろ。 ごめんといいいよと待って」

すごいなあ… 女の子とイッパイ付き合ったことあるんだなあ…

そんな考え事してたりよーが言った。怒ったように。言った。

「で？ 答えはモ チ ロ ンNOだよな？」

「わっ…わかんないよ…」

「は？ なんで？」

「え… だって！…だって…」

「友達だから？」

りよーは、他のヒトに喋るようなとっても醒めた声だった。

「……ちがう」

りよーはピクッと眉毛を動かして言った。

「へー？ まさか、スキナの？」

「……わかんない…」

「わかんないじゃないだろ… 俺はさ… 俺さ…」

今日のりよー、落ち着いてる。

「なに？」

僕は、分かった。何言われるのか。

だから、びくびくして言った。

りよーは。呆れた。

「いや…なんでもない」

「どうして？ 言わないの？」

僕って酷い。辛いのに…

「言ったら、OKしてくれんの？ しないだろ」

「すっ…す……るッ…」

「じゃあ。ボクトツキアツテクダサイ」

どうしよう。 あんなに、好きだった。優しかった。

りよーが怖い…

「やだっ…」

言葉が出ない。言葉が言えない…

怖くて…怖くて…ボロボロ涙を流してた。

「りゆ。 ツキアツテくれないの？」

「うあ…あ…う…あ…あ…」

無理だ。喋れなくなっちゃった。

「りゆ。ツキアツてくれないの？」

冷たく言う。冷たく、醒めてた。

「りゆ。こっち向いて」

涙をぐしぐし拭いて、顔を上げた。

悠の手はゴツゴツしてたのに、僕の手なんてぷにぷにだ。りよー。こんな近くにいたんだ…

「シテもいいか？」

何なのかわかんなかったけど。ただ、りよーが怖かった。

愛してる って、何語？ かっこつーかっこ（後書き）

エロはないよー。

しょーじき。自分でこの話書いていらだった。

っつか。 んか、さっぱりしないなあ？

とか。

とゆうことは何かさっぱりさせなきゃイケナイということか W W W

愛してる　って、何語？　かっこすりーかっこ

あのね。　りょーとは、別になんにもなかったよ。
でも。　仲が凄く悪くなった。

と、思う。それから、2日が経った。

そうだ、シゲの返事：

今日かあ：

足取りが重い。　学校が遠く感じる。

おなかいいたい：

何で緊張するんだろう：

ただ、嫌だって言ったら。　終わるのに。

りょーとだって仲良くなれるはずなのに。

でも、どうしよう：　告白されて、嫌だって思ったことない：

だって、全然嫌じゃなかったもん：

だけど、付き合えるってわけじゃないし：

それに、りょーとも仲良くなりたい：

だけど。　嫌だって言えない：

どうすれば、いいのかな：

どっちも嫌だ。　どっちも嫌っ：だけど、どっちなんだろう：

僕は、どっち言っちゃうんだろう。

他にもう一つ：ないのかな？

自分のことだからさ：

作れるよね：

作らなきゃどうにもならないし。

よしっ！　考えるぞ：

考えようとしたら、後ろから大きくド突かれた。

鼻が、机にぶつかった。

「いったあ：　誰っ！？」

「あー俺、俺。　返事はー？」

これって新手の俺俺詐欺？ ニコツとすんな。

ニコツてした顔が、犬。 友達が飼ってたゴールデンレトリバーの笑顔にそっくり。

馬鹿じゃない？ って言うぞー！ 言う…

「ばっ…」

で、止まった。

おもわず、奇声をあげるかと思った。

シゲの肩をりょーが掴んでた。

「りゆ。 話すぞ。3人で。」

そう言って、りょーは屋上へと足を上がらせた。

空はまるで、濃くふてぶてしいフレンチブルーの絵の具をスーツと大雑把に引いたみたいで。

魚のうろこが剥がれたみたいな雲が散々としていた。

「きれーな初夏の天気だねー」

僕はちばけたように言った。

「あのさ… 何？ りゆのおやっさん。 娘さんはヨメに貰いますよ。」

シゲが皮肉そうに言った。

「…おいつ！」

りょーが叫んだ。

シゲもびっくりしてた。

「りゆをさ… りゆを… りゆを幸せに出来んのか？ お前…」

「モチロン！ 出来ますぜい。 おやっさん」

「本気で言ってるんだな。 幸せにしてやれよ…俺じゃ、出来ねーから…」

「おやっさんもりゆの事好きでしたのに どう…」

どうしたんですかって言おうとしたんだと思う。 でも、りょーに遮られ

「俺も好きだ。 今も好きだ。 だけど…りゆを、幸せには出来な

い… りゆと会うと、りゆのその笑顔を壊したくなる… りゆを襲いたくなる… りゆを俺だけのものしたくなる…」

どうゆう意味なのかは、わかんない。けど、言葉は重かった。りよーの愛が僕にひしひしと乗っかってくる…

「りゆ、重いだろ？ 俺の愛は重いんだよ お前に乗せたくない… 重い鎖をりゆに持たせたくない… だから、シゲに頼んだ。俺じゃ、もう幸せには出来ない…」

どんどん、声が低くなる。どんどん、言葉が小さくなる。

僕って気付かれないようにりよーに愛されてた。

りよーと居るときの重さってそれだったんだ。 分かった。 けど、分かっただけじゃイケナイ。

嘘を付かなきゃ。 おっきい、おっきい。 嘘。

「あのね？ りよー… 僕は重く感じないよ？ りよー、優しいもん」

僕はニパツと笑って誤魔化した。 僕は、誰と付き合えばいいんだろう…

答えは、簡単。 シゲだ。 だけど… だけど……

「シゲ？ 付き合おっか？」

「は…？ いいの？ あんな、嫌がってたのに」

「ううん。 嫌じゃないよ。 ただ、怖かっただけ」

くしゅん そんな笑い方が出来ればいいのに…

ヒトパターンしか笑顔を作れないなんて…

「いいの？」

再度、聞いた。

「うんっ！」

僕は、ある五月晴れのした天気の下で大きな大きな深呼吸と小さな小さな僕しか知らない嘘をついたんだ

愛してる って、何語？ かっこすりーかっこ（後書き）

終わり。

でも、完じゃないよーw

第3話が終わり。

何か、シャキツとしなかった。

もっと茎わかめみたいにならないと…

第4話：..しなった、ひまわり かっこわんかっこ(前書き)

ひっさしでげす。

第4話..しなった、ひまわり かっこわんかっこ

かんかん照りの太陽。

僕は、夏が嫌いだ。

どうしてかって？ 暑いから。

夏なんてだいいっ嫌いだ。

「りゅー」

そして、暑苦しい男が一人来た。

僕に告白した時よりもでかくなって今、180。

本当に、中学1年生かよ！

はぁと僕が冷たいため息をつく。

それを聞いて、君は僕の肩に腕を回して抱き寄せた。

あつっ……

「あつつい！」

僕は、学校へ向かうだけなのに汗だらだら…こんな事されたら、汗でぬめっちゃう。

僕は肩を解き、言った。怖いように

「おまーなー… おれはあついの！ みてわからないの？」

「わからない 俺は、お前が冷たくてきもちー」

「気持ち悪い。それに、バレル」

「バレ…うゝん…」

そう言ってこいつはしばらく黙り込んだ。

しばらく歩いたとこで急に大きな（こいつにとってはフツウの）声をあげた。

「カミング・アウト」

「しね」

「だいじょーぶ。 りゆならなんも言われない てゆうか、泣く奴がいるな」

腕を組んででっかい態度で喋ってる、何故なく奴がいる。

「なんで泣く？」

「ばかやろ。 りゆは女子よりも人気あるぜ！」

「ほう：越後屋。 それはキョーミ深い話だな」

僕は時代劇の人っぽく言った。

「ええ： 例えば、うちのクラスの相田^{あいだ}なんてどーでしょう？ かなり深く好まれてますぜい」

「ほおー 中々のイケメンがなあ： 他には？」

「そおですね、平井^{ひらい}や山野^{やまの}、それと福原^{ふくはら}にも人気ですぜい：」

ふーん。 って：

「：んで、おれはイケメンに人気あるんだ！」

「イケメンだけでもないでげす、アニキ。 そうだなあ：アニキにはどうてい叶いやせんがC組の野口^{のぐち}なんてどうでげす？ 可愛いでげす」

今度は下っ端山賊風に言った。 僕も山賊のアニキ風に言った。

「野口かい：おらあー好きじゃねいやい」

「好きになっちゃこまりますぜい。 アニキの好きなのは俺だけでいーでげす」

うぐ。 グサアツて心に来た。 寒いぜ、中々。

「お前、寒い」

「さみーのかよ：まだ夏だぜ：あゝ？ これからもっと暑くなるだぜー：色々な意味で：」

最後を小さく呟いてたが聞こえた。

「色んな意味ってどーゆーことだ！ それに、おめーが不良の真似したらじょーだんぽくねー！」

「いやあ：でも、カミング・アウトしたら、俺が恨み殺されちゃうなあ：」

「その前におれが恨み殺す」

「まー怖い」

空には、上へと伸びた雲だけがあった。

しまった、ひまわり かっこつーかっこ(前書き)

何か、前作(しまったひまわり一話)より随分遅れてしまってます
ません。

なにせ、まだ現役中学生。

学校のあとから、とは。キツインデスノWWW

まあ。のびのびとやっていきます。

しまった、ひまわり かっこつーかっこ

そうだ。悠^{ゆう}には話してない。

てゆうか、みんなにも話してないし。

僕が、話したくないし…

「りゆ。立花^{たちばな}には話さなくていいの？」

「いいの！ おれがいやなの！」

「どしたー？ そんなムキになって？」

だって…やだし…

「よっ！」

「ふわっ！」

ビックリした。悠が来た。

「りゆーかういあいなー」

「喋れてないよ 悠」

「立花。離れろ」

「はあ？」

「ぼっ…じゃなくて…」

「ん？ うん？ どったー？」

バカだ。シゲ。バカの塊だ…

「おい！ あほの塊！」

「は？」

「はあー？」

すっかりとしたシゲの声と、少し気の抜けた悠の声が聞こえて続
ていった。

「いくよ！ 学校！」

僕はイライラしてた。なんでだろう。

無頓着なシゲにイライラしてたのか、無気力に現れた悠にムカムカ
してたのかわからないけど。

とにかく。腹を立てていた。りよーに会うまで。

「ごめん。寝過ごした」

「ふーん… りょーが珍しいネエ…」

「何イライラしてんの？」

悠たちに顔を振った。

悠は首を振り、シゲは手を上げた。

「なーに。いらいらしてんの？」

優しそうに僕にもう一度問いかけた。

「べつに！」

イライライライライライライラ。

頭の中でこの言葉が廻ってく。

「ふぁっ」

りょーに抱きしめられた。ふいに。そこで、イライラが消えた。

「もーうっ！ やめてよ！」

「てめえ！」

冗談交じりにシゲが怒った、悠が呆れたように

「誰かさんは、オレのこと糞ガキって言ってたようなぁ…」

「黙れ。俺だって抱きしめたいときはある」

「抱きしめんな」

「べっ…つにー…りょーならいいもん」

シゲが冷たく低く言い放つ。

「おいおい。勘弁してくれー… 俺からりゅをとったらなにがのこるんだー!!」

「なにその、恋人同士…みたいな発言。おまーらまさか…なわけ

ないよなぁ…」

「そうだよ。何でぼくがこんなおとこ…」

「こんなってなんだ！ 別に…お前の好みにあわせてねーよ!!」

最悪だこいつ。もう、しんない。

「死ねばいいのに。シゲなんて… バーカ！ 死ねっ！ なんで

…」

…」

「なに、いつてんの？」

悠が割り込んできた。まるで分かってない。まさか…悠ってか
なりの鈍感？

「りゅ言いすぎだろー 友達なくすぞー」

「え…」

「はあ？…」

「ああ…」

それぞれ違う声出して、3人は顔を見合わせた。

「ぷっ…あはは〜」

「どしたりゅ？」

別に〜

「別にいー 悠のバカさに何もかもが晴れた なんか。ありがとっ
！」

「ああ…」

「おれ、なんか今年の夏は。上手くやってけそう！！」

4人笑顔になり。あと、一週間で夏休みの学校に向かい。歩いた。

しなった、ひまわり かっこつーかっこ (後書き)

以上。どうでもいい話でした W W W W W W

4話でした。

最終話：とても大切な、何か かつこわんかつこ（前書き）

いよいよ最終話。

ちゃんと終わってくれるのでしょうか？
W
W
W

最終話…とても大切な、何か かつこわんかつこ

もしも自分が死んだら悲しんでくれる人は居るのでしょいか？

最終話 とても大切な、何か

今年の夏休みは楽しかった。 いつもと違ってー
毎日遊んでた。

そうだ、まだ悠に話してないや。
いい加減話さないと。

ばれたときにおこられちゃうや。
でも、話しにくいな…

「ねえ悠」

「んー？」

ゲームをしながら返事をしてくる。

「とつてもね、とつても大切な、何かって何かな？」

「なんだそれ？」

続けて悠は

「そーいや前にもそんなこと聞いてなかったっけ？」

「そっかな？ そうだっけ？」

前にも話したっけ？

「オレ、なんつったか忘れたけど。 多分、自分なんじゃない？」

「どうして？」

「自分が居なけりゃ何も出来ないじゃん」

「そーれーと」

続けていつてきた。 悠は首を上げてきたから、僕も思わず首を上げる。

「また、なんかあったのか？」

え… なんて

「え？　なんで…」

「前、聞いてきたときりょーにキスされたとかじゃったじゃん」

「そっか？　なあ…」

語尾が弱気になった。　りょーのこと思い出して。弱気になった。けど、あんまり覚えてない…

「おれ。　りょーになににされたんだっけ？」

「覚えてないんだ」

「うん」

間が出来た。悠はなぜか声を転がすように息を吹いた。

「オレもわかんね」

「なにそれ？」

「だってさ。　おぼえてないぜ。　いつの話だ？　小5だぜ」

そっかー…　もう、そんなに前かあ…

不意に悠に手を持たれた。　静電気が走った。

残暑の残る秋に珍しい。

そうだ。　そっか…　そっか…　そう…だあ…

思い出した…　電気が走ったんだ。

残暑が厳しくてクーラーかけてるのに、汗が出た。

っーと流れていく汗は気味が悪くて思わず、汗を拭いた。

とても大切な、何か かっこつーかっこ

そうだ…

青い火花が散った。

青い光が。 散ったんだ。

冬。 しんしんと雪が 初雪が積もり。

白銀。 プラチナ。 ううん。 凄い綺麗な白。

それだけは今でもずうっと鮮明に覚えてる。

綺麗過ぎたから、もう見られないと思ったから。

手足の先がしもやけを起こした、朝の事。

とても寒い冬のこと。 ずっとずっと寝ていたかったのに…
りょーが僕のベットの横に居て。

目を擦ってた手を持たれた。

バチツと火花が散る。 青く青く

とっても綺麗な静電気。

一瞬で強くはじけた静電気。

その後すぐにキスをされた。

2秒で離れた気弱なキス。

けど、とっても柔らかなキス。

黒くまっすぐな瞳がこっちを見てて、首を引っ込めた。

初めてのキス。

白い世界の中で起きた、キス。

少し不器用で少し甘くて少し…切なくて。

少しづつ感じていくりょーの愛情が怖くて帰ってと思わず言っちゃった。

そうか。

そんなこと、あったような…

忘れちゃいけないな…

忘れたら怒られる。

言わなくちゃね。悠に。

「ねえ　悠。　話したいことがあるんだ」

「なんだー？」

「うん。この話をしたら3年後には忘れているのかな？」

「そんな簡単なことなのか？　忘れるようなことなのか？」

「ううん…」

「忘れねえさ。　思い出したんだろう？」

「なにを？…」

「しらきんじゃねーよりよーとのキスのことだよ」

「うん」

「…早く言えよ」

「じゃあ言うよ」

今の僕の大切な人。　君に教えるよ。

僕の恋人を。

初めての恋人のこと…

僕はフヘンな中学生　了

とても大切な、何か かつこつーかつこ (後書き)

終わりました。

終われました W W W W

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9864d/>

僕はフヘンな中学生

2010年10月17日15時03分発行